ブラジルへの日本人移住

日本人のブラジルへの集団移住は、1908 年の笠戸丸によって始まります。初期の移住は、サンパウロ州コーヒー農場への雇用契約移民でした。しかし、不作や不慣れな労働、低賃金などが原因で、契約満了以前に脱耕する者が多く出ました。

1924 年以降、移住者の大量送り出し時代が始まるとともに、日本政府が船賃や移民会社手数料を支給するなど、国策としての移住が推し進められました。1933 年、34年には最盛期を迎え、両年ともに 2 万人を超える移住者を記録します。

戦後は 1952 年に移住が再開され、アマゾン地域及びマット・グロッソ州へと移住者が渡りました。1960年には日伯移住協定が調印され、この年には7千人を超える移住者がありましたが、日本経済の発展に伴い 1964 年には1千人を下回りました。その後も移住者の数は減り続け、日本政府も移住者送出事業を 1993 年に事実上終了しました。

このように日本人のブラジルへの移住者数は、戦前には約 18 万 9 千人、戦後には約 6 万 8 千人にのぼります。現在ブラジルの日系人口は約 140 万人と推定されています。

サントス港での下船風景

笠戸丸移民

移民船笠戸丸は 1908（明治 41）年 4 月 28 日神戸港を出航し、6 月 18 日サントス港に到着しました。笠戸丸にはブラジルへの第 1 回集団渡航移民 781 人が乗船していました。笠戸丸移民は、ブラジルへの日本移民創始者とされる水野龍（りょう）を代表とする皇国殖民会社と、サンパウロ州政府との契約により、コーヒー耕地における就労を目的としていました。

この第 1 回移民の到着を報じた地元の新聞『コレイオ・パウリスターノ』（当時）は、6 月 25 日付け第 1 面の記事で、日本移民に対して好感を示して「清潔で規律正しい移民」と称賛していました。笠戸丸の名はそれ以降、100 年に及ぶ日本とブラジルのつながりを象徴する名称となっています。

笠戸丸

水野龍（最前列中央）を囲んだクリチバの日本人会
1936 年頃

italianos.»

Os japonezes em S. Paulo

Está S. Paulo com os primeiros immigrantes japonezes.

Chegaram no dia 18, pelo vapor Kassato Maru', depois de 52 dias de viagem do Japão a Santos, tendo tocado só em dois portos: o de Singapura na Asia e o da cidade do Cabo na extremidade austral da Africa. Deste ultimo porto, o navio veiu directamente a Santos, tendo feito com uma regularidade digna de nota sua derrota do porto de procedencia, Kôbe (Japão), ao porto de destino (Santos).

O vapor Kassato Marú trouxe para o Estado de S. Paulo 781 japonezes, que constituem a primeira leva da quantidade que deve trazer a Companhia Japoneza de Immigração e Colonização, que contractou com o Estado de S. Paulo a introducção de 3.000 familias.

Estes 781 japonezes agora introduzidos agrupam-se em 164 familias, sendo cada familia constituida, em média, por 4,5 in-

日本移民の到着を報じた
コレイオ・パウリスターノ紙
（ブラジル日本移民史料館提供）

コーヒー栽培

日本人移民は当初、契約によりコーヒー農場でコロノ（雇用契約労働者）として就労しました。サンパウロ市から州北部･北西部および西部に向けて建設されていた鉄道、モジアナ線、パウリスタ線、アララクアラ線に沿って位置する広大なコーヒー栽培地域を配耕先としていました。2 年または 3 年の契約期間終了後、農場に留まることを選択した移民はごくわずかで、自作農への道を歩むか、都市部や都市近郊における独立事業を選択しました。

日本人移民分布図
『伯剌西爾年鑑』1933 年 伯剌西爾時報社

コーヒー農場の風景

移住地での生活

　移住先のコーヒー農場での生活には、時として日本では想像もし得ない体験が待っていました。例えば、日本人の生活に欠くことのできない風呂です。当初は、石油缶でお湯を沸かし、大きなたらいで行水することで満足しなければなりませんでした。しかし、ドラム缶が手に入るようになると、五右衛門風呂のようにして入りました。もちろん簡単な囲いだけの露天風呂でしたが、燃料のたきぎはいくらでもあったので、水の便さえよければ毎晩でもたてることができました。

日本から持参したドラム缶（レプリカ）

　また、収穫を待つ身に降りかかる天災もありました。霜害と蝗害（こうがい）（バッタの大量発生による災害）です。バッタの大群による襲来は、突如として黒雲が現われたかのように空が曇り、次の瞬間には大きなバッタが頭上から降り注いでくるもので、作物という作物が食い尽くされてしまいました。

バッタの大群と戦った火炎放射機

Brasil

ブラジル農業に果たした役割

日本人移住者は集団地を形成し、自らの生産活動を守るために農業協同組合を組織しました。そして、篤農精神に基づき、在来種を改良しあるいは新品種を導入して、ブラジル農業を豊かなものにしていきました。

また、都市近郊に入った農業者は、主として蔬菜栽培に携わりました。それまでブラジルでは、トマトやキャベツなど限られた種類の、それも低品質のものしか生産されていませんでしたが、日本人移住者が品種改良を行い、生鮮野菜の普及に努めました。ジャガイモに始まり、様々な蔬菜を次々と取り入れた日系農家は、養鶏や果樹栽培にも手を広げ、近郊における集約的な園芸農業を確立していきました。

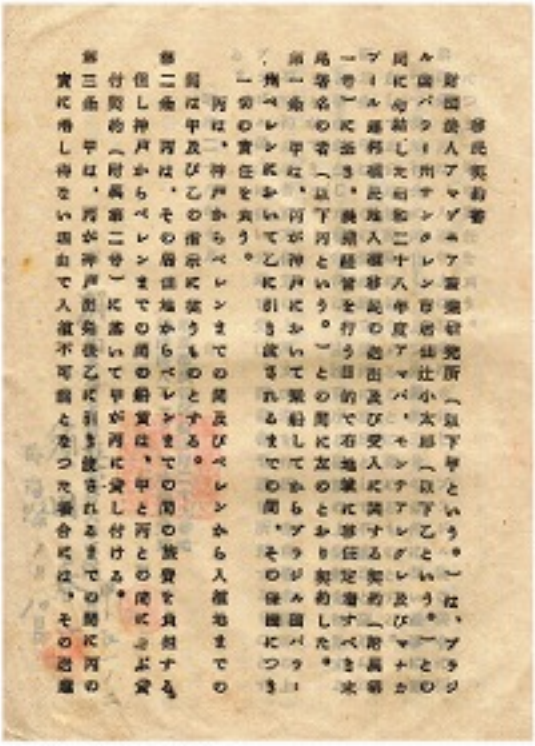
日系人が設立したコチア産業組合の働き蜂マーク
（ブラジル日本移民史料館提供）

馬鈴薯栽培

Brasil

戦後移住

　戦後におけるブラジルへの移住再開は、ブラジル在住の2人の民間日系人が大きな役割を果たしました。パラー州サンタレンの辻小太郎とサンパウロ州マリリアの松原安太郎です。辻は北部ブラジルへ五千家族、松原は中西部へ四千家族の導入計画を、当時のヴァルガス大統領に対して直接交渉し許可を得ました。「辻移民」第一陣 17 家族 54 名は 1953 年 2 月 11 日にリオ・デ・ジャネイロへ、「松原移民」第一陣 22 家族 112 名は同年 7 月 7 日にサントスへ、それぞれ到着し戦後移住が開始されました。



辻移民契約書の表紙

松原安太郎（左）とヴァルガス大統領（中央）
（ブラジル日本移民史料館提供）

Brasil

日系社会の行事

今日、日系人の多いサンパウロ州やパラナ州の各地では、お釈迦様の生誕を祝う花祭りや、日本の国花桜にちなんだ桜祭りなどが行われるほか、モジ・ダス・クルーゼスの柿祭り、バストスの卵祭りなど、日系集団移住地では収穫祭も行われます。このほか、サンパウロでは、開拓先亡者慰霊のための移民祭や、七夕祭り、日本文化を広く紹介する日本祭などがよく知られています。さらには、多民族国家を象徴するイベントとして、サンパウロの国際民族舞踏祭やクリチバのパラナ民族芸能祭といった移民文化を紹介する芸能祭も、日系社会においてその文化伝承に重要な役割を果たしています。

パラナ民族芸能祭で日本の踊りを披露する日系二世たち
1964年

サンパウロで行われる七夕祭り

日本祭の長野県ブース前で披露される餅つき

Brasil

日本語学校

戦前においては、入植地におけるコミュニティの中心として日本語学校が建設され、祖国文化を維持するための子弟教育が行われていました。多くの地域で日本人会が学校を設立し、州政府に対して教育施設として提供する一方、州政府はポルトガル語などを教える教師を派遣しました。そして、日本人会でも日本語を教える教師を雇用しました。

しかし、第二次大戦勃発を端緒として、日本語学校はすべて閉鎖に追い込まれました。戦後は、1950年代に入って日語*学校連合会が発足し、家庭における意思の疎通、日本文化や、勤勉・誠実・正直といった長所の継承を目的として日語学校が再出発しました。その後、グローバル化や世代交代の流れの中で、継承語としての日本語教育とともに、外国語としての日本語教育も行われています。

大正小学校　サンパウロ　1932年
（ブラジル日本移民史料館提供）

入植地における学校　地名・年代不明

＊現地では、日本語学校よりも日語学校という表現が一般的に使われています。

Brasil

ブラジル日本文化福祉協会とブラジル日本移民史料館

戦後、1950年代の半ばになって、ブラジル全土の日系人団体を統括する機関が生まれました。サンパウロ市創立400年祭をきっかけとして、日本人協力会組織をもとに発足したサンパウロ日本文化協会です。その後、この団体はブラジル日本文化協会、さらにブラジル日本文化福祉協会と改称し、今日までブラジルにおける日系人を代表する団体として様々な活動を維持してきています。

そして、1978年には、ブラジル日本移民70周年記念事業の一環として、同協会ビル内にブラジル日本移民史料館が設立されました。この史料館は、ブラジルに渡った外国移民の歴史や生活を紹介する施設として屈指のもので、日本人移民の歴史と生活が分かりやすく展示されています。

ブラジル日本文化福祉協会ビル
（ブラジル日本移民史料館提供）

ブラジル日本移民史料館の入口
（ブラジル日本移民史料館提供）

Brasil

在日日系ブラジル人社会

1980年代後半から始まった、ラテンアメリカ日系人による日本での就労を目的とした来日、いわゆるデカセギ現象は、すでに20年の歳月を経ています。今日では、日系ブラジル人全体の約20%にあたる約30万人が日本に滞在しており、そのうちの20%に相当する約6万人がすでに永住権を得て、定住化への傾向も進みつつあります。人口の15%をブラジル人が占める群馬県の大泉町、2万人のブラジル人が集住する静岡県の浜松市、大都市圏の多文化地域での共生を模索している横浜市など、現在では47都道府県のすべてに日系ブラジル人は在住しており、今後、在日日系人コミュニティは多様な展開が予想されます。

横浜市に日系人が設立したNPO法人事務所

群馬県大泉町のブラジリアンプラザ

静岡県浜松市のブラジル人経営雑貨店